

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Explication essentielle de la liberté dans "Manon Lescaut"
Author(s)	小住, 毅志
Citation	フランス文学, 10・11 : 10 - 21
Issue Date	1969-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040895
Right	
Relation	



Explication essentielle de la liberté dans “Manon Lescaut”

小 住 毅 志

I

兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。

(ガラテヤ人への手紙 5-13)

Manon Lescaut の本質的意義を把握する際、次の三点から検討を加えることが出来る。

- 1) 愛 (amour) の観点
- 2) 道徳 (morale) の観点
- 3) 自由 (liberté) の観点

第一、第二の観点については旧来度々論じられているが、私は新たに第三の観点から検討する必要性を発見し、プレ・ロマンティスムに位置付けられるこの作品の自由 (liberté) の文学としての一面を解明しておく。

Manon Lescaut は何よりも先ず人間の心情 (cœur) が取り扱われ、愛 (amour) の中で人間の生き方が課題となっている。

心情 (cœur) と愛 (amour) との関連からは、この作品を近代恋愛小説の先駆として評価する観点が生じてくる。美貌と魅力に溢れ奔放にして献身的な面を持つ Manon と愛 (amour) 故に総てを抛ち宿命的に彼女に引き摺られていく le Chevalier des Grieux との織りなす心情 (cœur) の系譜は、美的面のみならず情緒的面に於て共感を誘発しようとしており、魂 (âme) を囚にしてしまう情念 (passion) の偉大さを証明する。しかも、二重の告白形式、即ち、le Chevalier des Grieux が <je> の形式で告白したものを le Chevalier des Grieuxに会った <je> が読者に告白する形式がこのロマン に信頼感を与えるとともに、告白形式そのものの直截性と心情 (cœur) そのものを剥き出した告白させる真実性とが相俟って恋愛小説としての効果を強めている。

魂 (âme) と情念 (passion) との関連からは、恋愛の観点のみならず道徳の観点が生じてくる。Manon と le Chevalier des Grieux との言動は大ロマンスであると同時に «un exemple terrible de la force des passions» でもある。即ち、この作品は生彩を放つ恋愛の昇華と恋愛が如何に人生を狂わすかが描かれている。ここに道徳的観点の這り込む余地がある。作者自身序文に於て «L'ouvrage entier est un traité de morale, réduit agréablement en exercice.¹⁾» とこの作品を定義付けているが、Manon と le Chevalier des Grieux との悲劇的結末とその後の叙述をも加味して、作者が道徳的意義をこの作者に与えたことは明白である。

しかし、作品終部に於て «Après ce que vous venez d'entendre, la conclusion de mon histoire est de si peu d'importance, qu'elle ne mérite pas la peine que vous vouliez prendre à l'écouter.²⁾» という但し書きもあり、道徳自体よりも作中人物 Manon と le Chevalier des Grieux の激しい恋愛の道程の叙述が大部分を占めている。

作者 Antoine-François Prénost は軍人、僧侶、文人の経歴の中で «un anémurier» として信仰と放縦の間を揺曳しており、放縦 (libertinage) と悔恨 (remord) の二面性 (doublement) から恩寵 (grâce) による魂 (âme) の昇華への両者の内質の変化の位相が恰も完全に一致しているかの如くだが、実証的見地からこの際徒らな伝記的批評は止めておく。

この作品の実態は、要するに、作者によって «un traité de morale» と定義付けられ乍らも心情 (cœur) の真実な告白の系譜である。この点からして、Anatole France の «Mais c'est quand votre livre fut fini, l'abbé, que vous eûtes ces belles idées. En agitant votre plume, vous fûtes seulement inspiré par le souvenirs de vos premières ardeurs.³⁾» という臆測が生じている。

自由と抑圧の共存する時代背景、17世紀より比較的自由な生活様式を持つ貴族と市井人との描く風俗上の側面等の外在的問題よりも、この作品にあっては、心情 (cœur) の系譜を厳密に分析しておくことが不可欠である。

II

Manon と le Chevalier des Grieux との愛 (amour) は静的愛ではなく情熱的愛として描かれている。心情 (cœur) が昂揚し種々の束縛にも拘らず人間の魂 (âme) が一つの目的に志向する際、当然、自由 (liberté) の契機が生じ得る。

この作品にあっては、愛 (amour) の発露の過程に於て自由 (liberté) が存在している訳だから、愛 (amour) の発露の原理と過程に即してこの作品を分割し検討する。

この発露の過程は図式化すれば次の如く表わされる。

<情念> (passion)——<自由> (liberté)——<放縦> (libertinage)——<運命> (destin)——<恩寵> (grâce)

これらの要素は作品の条の進行過程の順序に従っているのではなく、各項明確に分立しているのでもない。各項互いに関連し合い乍ら微妙な消長の様相を持つ作品の内質の図式化である。

1) <情念> (passion) の項

情念 (passion) は、Manon と le Chevalier des Grieux が各々宗門に入りに行く道中で偶然に出合った時からManon の死の時まで続いている。即ち、«je me trouvai enflammé tout d'un coup jusqu'au transport⁴⁾» から «J'y plaçai l'idole de mon cœur, après avoir pris soin de l'envelopper de tous mes habits, pour empêcher le sable de la toucher.

Je ne la mis dans cet état qu'après l'avoir embrassée mille fois, avec toute l'ardeur du plus parfait amour.⁵⁾» までである。この情念 (passion) は Tiberge の友情と説得によって le

Chevalier des Grieux が神学校で宗教と学問に没頭することによって中断されているが、これは人間存在としての志向の転換であって情念 (passion) の内質の変容ではない。

この情念 (passion) は二面に志向している。

一つは情念 (passion) の昇華の面への志向であり、悲惨な境遇の下でも展開される甘美な世界につながっている。魂 (âme) が心情 (cœur) の美的、夢想的陶酔的面に誘われて思わず這り込んでしまう世界である。M. de T..... はこれを次のように説明している。

«Pour le lieu, (ajouta-t-il,) il ne faut plus l'appeler l'Hôpital; c'est Versailles, depuis qu'une personne qui mérite l'empire de tous les cœurs y est renfermée.⁶⁾» (括弧挿入は論者による)

もう一つは情念 (passion) の推進力の面である。心情 (cœur) に支えられた情念 (passion) は精神 (esprit) を触発し魂 (âme) に能動性を与え、具体的な言動に結びつく。le Chevalier des Grieux はこれを次のように説明している。

«Je l'assurai que, si elle voulait faire quelque fond sur mon honneur et sur la tendresse infinie qu'elle m'inspirait déjà, j'emploierais ma vie pour la délivrer de la tyrannie de ses parents et pour la rendre heureuse.»⁷⁾

この二面をふまえた情念 (passion) が心情 (cœur) と精神 (esprit) と相互作用を保ち乍ら魂 (âme) を変容させていく過程において、自由 (liberté) が生じ相対的な変容の様相を示している。次の La Harpe のこの作品に対する定義はこの間の事情を説明しており、前述した作者自身の定義と一致する一面の真理である。

«,exemple frappant de cette vérité morale, qu'il n'y a point d'âme qu'une grande passion n'élève au-dessus d'elle-même, et ne rende capable de tout.»⁸⁾»

2) <自由> (liberté) の項

le Chevalier des Grieux は貴族の家庭に育っているが、17世紀の貴族の家庭に於けるような厳格な家門の戒律に従っておらず、父親は le Chevalier des Grieux に対して寛大な態度で接している一面があり、多少の生活、風俗上の自由 (liberté) がある。Manon の方にも金銭に対する趣味や快樂 (plaisir) の愛好の露骨が呈示、奔放な生活態度が反映するブルジョワ的自由 (liberté) がある。保守的な家庭に育ち世間知らずの le Chevalier des Grieux は Manon を通して知ったブルジョワ的自由 (liberté) に当惑させられるばかりである。

肯定的な要因としてであれ、否定的な要因としてであれ、時代 (temps) と環境 (milieu) は人間の心情 (cœur) と精神 (esprit) に作用を及ぼすと同時に、人間の心情 (cœur) と精神 (esprit) は時代 (temps) と環境 (milieu) に作用を及ぼす。

Manon と le Chevalier des Grieux は愛 (amour) の世界を築くために情念 (passion) に駆られて自由 (liberté) を追求する。

自由 (liberté) を追求する彼等の魂 (âme) の系譜は上昇様式と下降様式を持つ。

上昇様式は自由 (liberté)——快樂 (plaisir)——幸福 (bonheur) である。即ち次の如きで

ある。

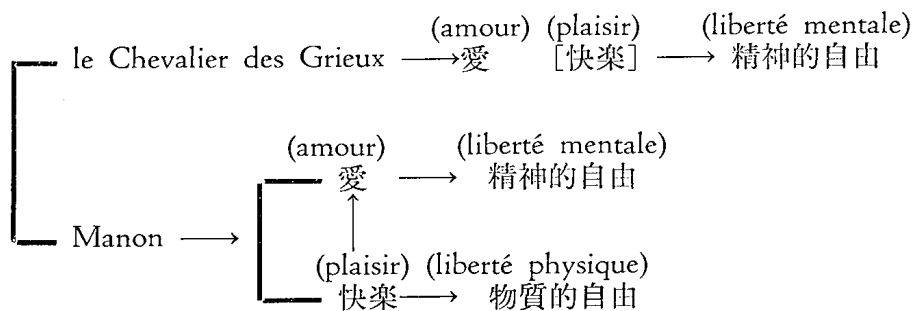
- 1) «Elle me confessa qu'elle me trouvait aimable et qu'elle serait ravie de m'avoir obligation de sa liberté.⁹⁾»
- 2) «Dieux! pourquoi nommer le monde un lieu de misères, puisqu'on y peut goûter de si charmantes délices?¹⁰⁾»
- 3) «——……Ce n'est point à moi d'exiger des raisons de votre conduite; trop content, trop heureux, si ma chère Manon ne m'ôte point la tendresse de son cœur!¹¹⁾»

下降様式は自由 (liberté)——苦悩 (douleur)——悔恨 (remord) である。即ち、次の如きである。

- 1) «Tout ce qu'on dit de la liberté à S[aint]—Suplice est une chimère.¹²⁾»
- 2) ——……Cependant, de quelque nature que fussent les miens, il est certain qu'il devait y entrer de la douleur, du dépit, de la jalousie et de la honte. Heureux, s'il n'y fût pas entré encore plus d'amour!¹³⁾
- 2) «L'amour est une passion innocente; comment s'est-il changé, pour moi, en une source de misères et désordres?¹⁴⁾»

Manon と le Chevalier des Grieux の愛 (amour) は哲学的にはエロスであり宗教的には肉の愛であるが、彼等の心情 (cœur) と精神 (esprit) の志向する所は各々異っている。le Chevalier des Grieux は自己がどのような境地に陥っても情念 (passion) に燃え立ち、愛 (amour) を自由に求め、それに満足することが出来る。Manon の方は享樂的な性向と女としての虚栄心も入り混り、愛 (amour) 以外にも快樂 (plaisir) を求める。

彼等の追求する自由 (liberté) は相対的に異っており、これを図式化すると次の如くなる。



le Chevalier des Grieux は自己の立場を次のように説明している。

- 1) «——…… Vous me revoyez tel que vous me laissâtes il y a quatre mois: toujours tendre, et toujours malheureux par cette fatale tendresse dans laquelle je ne me lasse point de chercher mon bonheur.¹⁵⁾»

- 2) «——……Ce n'est point à moi d'exiger des raisons de votre conduite; trop content, trop heureux, si ma chère Manon ne m'ôte point la tendresse de son cœur!¹⁶⁾»

Manon は自己の立場を次のように説明している。

1) «: Je te jure, mon cher Chevalier, que tu est l'idole de mon cœur, et qu'il n'y a que toi au monde que je puisse aimer de la façon dont je t'aime; mais ne vois-tu pas, ma pauvre chère âme, que, dans l'état où nous sommes réduits, c'est une sottise vertu que la fidélité? Crois-tu qu'on puisse être bien tendre lorsqu'on manque de pain?¹⁷⁾»

2) «G...M...l'avait reçue avec une politesse et une magnificence au delà de toutes ses idées.

Il l'avait comblée de présent; il lui faisait envisager un sort de reine. Elle m'assurait néanmoins qu'elle ne m'oubliait pas dans cette nouvelle splendeur;¹⁸⁾»

《la proie d'une passion》という留保付きで愛 (amour) の絶対性を認めている面では両者は同質であるが、Manon の言葉を精神的自由 (liberté mentale) と物質的自由 (liberté physique) の両面での自由 (liberté) の追求の必要性に受け取るとしても、両者の内質は根本的に異っている面がある。即ち、le Chevalier des Grieux の自由 (liberté) の追求は《la proie d'une passion》の裏面をなす両者の感情 (sentiment) の絆に支えられて Manon の美貌と魅力に志向するエロスの愛の中に於てである。Manon は物心両面の自由 (liberté) の追求の必要性の妥協点を《la fidelité du cœur》に置いているが、これは完全に合理性を持ち得ず彼女の性格上の欠陥が浸潤している。彼女には《la fidelité du cœur》と《le penchant au plaisir》を妥協させ、これが二人の悲劇的結末の低次の原因となっている。Manon の自由 (liberté) の追求は寧ろ快樂 (plaisir) の中に於てであると言うべき性質を帯びている。

両者の追求する自由 (liberté) の内質と志向の相違は、愛 (amour) に於ける感情 (sentiment) の絆を損わないが、彼等の魂 (âme) の不完全さと境遇の悲惨さに作用を及ぼしている。

自由 (liberté) の追求は本質的に秩序 (ordre) と乖離する面を持っているが、彼等の追求は不完全で病的な様相を呈している。

Manon と le Chevalier des Grieux の生活態度の様式は次の如く表わされる。

自由 (liberté)——独立 (independance)——輕薄 (frivolité) この様式は魂 (âme) の上昇様式の勢いに乗り経過し、序々に下降形式に接近している。

この様式を踏む彼等の自由 (liberté) の追求は初志を折った愛 (amour) の逃避行となり、社会的存在者として歪つな形をとる。彼等の追求する自由 (liberté) は社会と個人との葛藤の面に於て捉えられてくる。人間の社会内存在者としての事実性と魂 (âme) の上昇様式と下降様式に支えられた彼等の生活態度の様式とは、彼等の愛 (amour) に於ける自由 (liberté) の追求を社会秩序に対する反抗 (révolte) に結び付ける。即ち、彼等の魂 (âme) は愛 (amour) に於ける感情 (sentiment) の絆に内化すると同時に社会に対する反抗 (révolte) に外化している。

理性 (raison) を欠如し情念 (passion) 導にかれた彼等の衝動的な自由 (liberté) の追求

は、彼等を放縦 (libertinage) に追いやり、彼等に «une fille de joie» や «un fils ingrat et rebelle» のレッテルを貼ることになる。

3) <放縦> (libertinage) の項

Manon と le Chevalier des Grieux の自由 (liberté) の追求は客観的には放縦 (libertinage) の様相を呈している。彼等は自己の立場を次のように説明している。

Manon—→«Je t'adore, compte là-dessus; mais laisse-moi, pour quelque temps, le ménage de notre fortune. Malheur à qui va tomber dans mes filets! Je travaille pour rendre mon Chevalier riche et heureux!¹⁹⁾»

le Chevalier des Grieux—→«Elle appréhende la faim. Dieux d'amour! quelle grossièreté de sentiments! et que c'est répondre mal à ma délicatesse!

Je ne l'ai pas appréhendé, moi qui m'y expose si volontiers pour elle en renonçant à ma fortune et aux douceurs de la maison de mon père;²⁰⁾»

彼等の弁明は一見妥当性を有している如く見受けられるが、彼等の悲劇を招いたのは運命 (destin) であると同時に彼等自身の魂 (âme) である。外部からの評価によって裏付けられるものであれ、悔恨 (remord) によって裏付けられるものであれ、放縦 (libertinage) は必ず内部要因を持つ。彼等の追求する自由 (liberté) の内質とそれに対する自己弁明は各々異っている。愛 (amour) 自体が調和を要求する面を持つのに対し、彼等の愛 (amour) の中での自由 (liberté) の追求の相違は、彼等の愛 (amour) に悲劇的色彩を加え、彼等の自由 (liberté) を放縦 (libertinage) に化してしまっている。彼等の放縦 (libertinage) の困たる自由 (liberté) の不調和は二重構造を持つ。即ち、両者間の自由 (liberté) の不調和と各人の内部に於ける自由 (liberté) の不調和である、恋人の美貌と魅力に惹かれる余り、総てを抛って恋人の中でのみ生きること、パトロンを作ることによって運命 (destin) を整えることも、両者間の自由 (liberté) の不調和の証左であり、各人の人格の中に於ける自由 (liberté) の不調和を反映している。これらの自由 (liberté) の追求の不調和性は、究極的には、彼等の魂 (âme) の不完全性に起因している。

Manon と le Chevalier des Grieux との放縦 (libertinage) は具体的な行為 (action) に結び付き、売春と賭博にまで達する。合理性を欠く彼等の社会に対する反抗 (révolte) は、彼等を Saint-Lazare, Petit Châtelet, Hôpital-Général の牢獄の束縛 (restriction) に導き、流刑と植民の荒廢のアメリカ、自由 (liberté) の天地へ追いやる契機となる。

彼等は反抗 (révolte) に失敗し追放 (exil) の憂目に遭い社会的存在者としての自由 (liberté) は奪われるが、愛 (amour) に於ける感情 (sentiment) の絆に志向する精神的自由 (liberté mentale) は外的状況の如何に拘らず脈々と続き、名誉心も社会秩序も不備のアメリカに於て開花している。

彼等を自由 (liberté) から放縦 (libertinage) へ導いたもの、魂 (âme) の不完全性の因となっているもの、それは道徳 (morale) と理性 (raison) である。

精神 (esprit), 感情 (sentiment), 快樂 (plaisir), 物質 (matière), 社会 (société) 等に志向す

る自由 (liberté) の総てを人間が合せ持つことは出来ないとしても、愛 (amour) 以前の人間存在の問題として、更に、この問題を愛 (amour) に反作用させて愛 (amour) をより良きものにするためにも、道徳 (morale) と理性 (raison) の必要性を彼等の言動は推察させる。何故なら、情念 (passion) の激しさが彼等の理性 (raison) を曇らせ、情念 (passion) の囚になった人間の心情の弱さ (la faiblesse du cœur) が道徳 (morale) を実行に移すことを防ぎ、彼等の境遇の悲劇的結末を招いているからである。

4) <運命> (destin) の項

運命 (destin) はこの作品の全体の底流をなしており、殊に、自由 (liberté) が放縦 (libertinage) に移行する過程に於て顕著である。人間の価値追求の多様性と全面的成就の不可能性から運命観が生じ得るが、Manon と le Chevalier des Grieux の場合、激しい自由 (liberté) の追求と幸福観に満ちた生活と裏腹に不幸な運命的境遇がつきまとい、魂 (âme) の下降様式に於て運命観は増々強まっている。

le Chevalier des Grieux は自己の運命 (destin) に対する意識を次の如く述べている。

« Je vais perdre ma fortune et ma reputation pour toi, je le prévois bien; je lis ma destinée dans tes beaux yeux;²¹⁾ »

彼等が情念 (passion) の囚になった時から彼等の意識の中に運命 (destin) が入り込み、情念 (passion) の勢いに乗った彼等の自由 (liberté) の追求は、この運命観と葛藤を演じている。

これを図式化すると次の如くなる。

1) 運命 (destin) を無視する段階

« Je t'adore, compte là-dessus; mais laisse-moi, pour quelque temps, le ménagement de notre fortune.²²⁾ »

2) 運命 (destin) に懇願する段階

« O fortune, (m'écriai-je,) fortune cruelle! accorde-moi ici, du moins, la mort ou la victoire.²³⁾ »

3) 運命 (destin) の勝利を認める段階

« Mes malheurs sont au comble; il ne me reste plus que de m'y soumettre.²⁴⁾ »

ここで注意しておかなければならないのは、運命 (destin) の勝利は、作者のこの作品の作成意図に支えられているが、Manon と le Chevalier des Grieux の自由 (liberté) の追求の全面的放棄を意味していないということである。彼等は運命 (destin) に対する服従を意識しながらも愛 (amour) それ自体の裡に於ける自由 (liberté) は失っていない。二人の運命 (destin) をしっかり結び付け合って、ひたすら愛し合うことの自由 (liberté) は失っていない。

« Mais, lorsque je l'eus assurée que rien n'était capable de me séparer d'elle et que j'étais disposé à la suivre jusqu'à l'extrémité du monde pour prendre soin d'elle, pour la servir, pour l'aimer et pour attacher inséparablement ma misérable destinée à la sienne, cette

pauvre fille se livre à des sentiments si tendress et si douloureux, que j’appréhendai que lque chose pour sa vie d’une si violente émotion.²⁵⁾»

人間の魂 (âme) の機能の裡, 物質 (matière) や社会 (société) に志向する自由 (liberté) を外的自由 (liberté extérieure) と名付け, 純粹に感情 (sentiment) や快樂 (plaisir) に志向する自由 (liberté) を内的自由 (liberté intérieure) と名付けるならば, 外的自由 (liberté extérieure) の意識は運命 (destin) の意識に敗北しているが, 内的自由 (liberté intérieure) の意識は運命 (destin) の意識に必ずしも敗北していない。

何故なら, 彼等の運命 (destin) は彼等自身が望んだものであり, 彼等は自己の愛 (amour) を運命的なものとして考え, Manon の死期に到るまで愛 (amour) に於ける内的自由 (liberté intérieure) の追求を止めていないからである。

次の文章がこの間の事情を説明している。

1) «Son esprit, son cœur, sa douceur et sa beauté formaient une chaîne si forte et si charmante, que j’aurais mis tout mon bonheur à n’en sortir jamais.²⁶⁾»

2) «Elle me dit, après un moment de silence, qu’elle ne prévoyait que trop qu’elle allait être malheureuse, mais que c’était apparemment la volonté du Ciel, puis qu’il ne lui laissait nul moyen de l’éviter.²⁷⁾»

5) <恩寵> (grâce) の項

le Chevalier des Grieux は愛 (amour) を自由に追求し乍らも次の如く漏らしている。

«Je ne sais ce que je suis et je ne vois pas clairement ce qu’il faut être.²⁸⁾»

彼等の追求する自由 (liberté) は真の主体性の確立の所産としてよりも情念 (passion) の囚の所産の面が強い。この救済的解決のために, 作者は魂 (âme) の上昇様式と下降様式の極に恩寵 (grâce) を持ち込んでいる。

le Chevalier des Grieux はこれを次の如く説明している。

«Je lui fis comprendre qu’il manquait une chose à notre bonheur. — C’est, lui dis-je, de le faire approuver du Ciel.²⁹⁾»

彼等の理想的愛は美德の愛 (amour vertueux) として表わされている。これは愛 (amour) の追求に於ける内的自由 (liberté intérieure) と外的自由 (liberté extérieure) の間を調整する理性 (raison) と道德 (morale) の所産でもある。更に, この理性 (raison) と道德 (morale) の背後に恩寵 (grâce) が働いている。美德の愛 (amour vertueux) の設定を頂点として, この作品は愛 (amour) と自由 (liberté) の問題を情念 (passion) の囚となった人間存在と恩寵 (grâce) の問題に擦り代えている。Anatole France もこの点を指摘して次のように述べている。

«Il préparait des livres de pitié, des traités destinées à confondre les incrédules; car, je l’ai dit, il n’était point du parti des philosophes et n’avait jamais préféré que les femmes à Dieu.³⁰⁾»

愛 (amour) の本質を道德 (morale) と理性 (raison) で包む作者の意図からして, 道

徳 (morale) と理性 (raison) を回復した所に人間の真の自由 (liberté) があることを推察する余地がある。勿論、恩寵 (grâce) の中の自由 (liberté) の世界が宗教学的に厳密に意味付けられるであろうし境涯を l'abbé Prévost として閉じた作者は当然このことを予想していたのかも知れないが、それ自体はこの考究に關与する所ではない。

蓋し、神と人間との関連の面としてではなく、人間と人生との関連それ自体という厳密にして茫洋たる面、即ち、流動的な時間性を帯びた面に於て捉えるならば、次のことが言えよう。

Manon と le Chevalier des Grieux との自由 (liberté) の追求は、失敗であると同時に成功であった。理性 (raison) の側から言えば彼等の追求の過程は失敗の連続であり、心情 (cœur) の側から言えば成功の一面がある。譬え、彼等の愛 (amour) が肉の愛であっても、愛 (amour) それ自体に於ける感情 (sentiment) の絆に志向する自由 (liberté) は脈々と続き、魂 (âme) の下降様式の過程を経ることによって複雑化、純化し、更に、一面に於て質的関連を保ち乍ら恩寵 (grâce) の中の自由 (liberté) に止揚している。

何故なら、誤れる情念 (passion) の囚になった感情 (sentiment) と理性 (raison) を正しく導く役割を持つのが恩寵 (grâce) であるとしても、次の如き至福 (félicité) の面は無視出来ないからである。

«—Prends garde, (lui dis-je,) prends garde, ma chère Manon. Je n'ai point assez de force pour supporter des maux que si vives de ton affection: je ne suis point accoutumé à ces excès de joie. O dieu! (m'écriai-je), je ne vous demande plus rien. Je suis assuré du cœur de Manon. Il est tel que je l'ai souhaité pour être heureux; je ne puis plus cesser de l'être à présent. Voilà ma félicité bien établie.³¹⁾» (括弧挿入は論者による)

III

Manon Lescaut に於ける自由 (liberté) の意義は意外に大きい。

Manon はこれについて次の如く述べている。

«;elle me confessa que, si je voyais quelque jour à la pouvoir mettre en liberté, elle croirait m'être redevable de quelque chose de plus cher que la vie.³²⁾»

勿論、人間の魂 (âme) に於ける自由 (liberté) は、必ずしも一つの価値に志向する動的自由ばかりでなく、自発的であり乍ら秩序 (ordre) との葛藤のない無風状態としての自由 (liberté) それ自体である静的自由もあるであろう。

この作品は究極的には恩寵 (grâce) の世界に入っているが、運命觀に付き纏われ乍らも、動的自由を追求する境涯を呈示している。

一般的に、Manon Lescaut は Jean Racine の作品と同様に取扱われている。Manon と le Chevalier des Grieux の自由 (liberté) の追求は情念 (passion) の囚としてであり、その行方を恩寵 (grâce) に頼っている面では明らかに Jean Racine の作品に類似している。これは自由 (liberté) を追求する主体の類似性であり、近代的意味合いに於いて、自我 (moi)

の解放の不完全性を示している。

蓋し、Manon Lescaut は Jean Racine の作品とは異質の面も有している。

Manon Lescaut は、確かに、魂 (âme) の不完全性が自我 (moi) の解放の不完全性に結び付き、それが逆に魂 (âme) に運命観の影を落としている。しかし、この作品は、不完全な魂 (âme) によってではあれ、《le ménagement de notre fortune》を経て自由 (liberté) を追求することを知っている。恩寵 (grâce) に自我 (moi) を完全に任せてはいても、

《Tout ce qu'on dit la liberté à S(aint)—Suplice est une chimère.³³⁾》

と公言出来る勇気を持っている。

作者はこの作品を17世紀にありがちな宗教的理性で以って締め括っているが、この作品に於ける名誉心 (esprit d'honneur) の希薄性、秩序 (ordre) と社会 (société) に対する反抗 (révolte) の顕在性は否めない。

次の le Chevalier des Grieux の言は、自由 (liberté)—放縦 (libertinage) の系譜の面と自由 (liberté) の権利の主張の面との接点として注目に価する。

《Prédicateurs, qui voulez me ramener à la vertu, dites-moi qu'elle est indispensablement nécessaire, mais ne me déguisez pas qu'elle est sévère et pénible.

Établissez bien que les délices de l'amour sont passagères, qu'elle sont défendues, qu'elles seront suivies par d'éternelles peines,³³⁾》

この作品には名誉 (honneur) や秩序 (ordre) を離れた全く異質の世界が拡大化されている。

快樂主義と結び付いた心情 (cœur) の自由な展開が呈示されている。心情 (cœur) の世界に於いて愛 (amour) を自由に追求し、愛 (amour) の歓喜に至福 (félicité) を感じることの権利の主張が見受けられる。

更に、極言するならば、宗教的色彩を帯びた美德 (vertu) 以前の段階であり、一步摩れば放縦 (libertinage) に流れ去る危険性を有する。微妙でぎりぎりの所にある心情 (cœur) の自由 (liberté) が存在している所にこの作品の一大特性があるのだ。

Manon と le Chevalier des Grieux の自我 (moi) の不完全性はあるが、私は Manon Lescaut に於ける自由 (liberté) に進歩の跡を認め、意識の改革の美的表現の面に於て、作者 l'abbé Prévost の自由 (liberté) の芸術家としての資質を確認するのである。

—完—

〔註〕

- 1) Abbé Prévost: Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut, Classiques Garnier, 1962, p. 4.
- 2) Ibid., p. 240.
- 3) Anatole France: Le Génie Latin, p. 249.

- 4) Abbé Prévost: Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut, Classiques Garnier, 1962, p. 17.
- 5) Ibid., p. 17.
- 6) Ibid., p. 239.
- 7) Ibid., p. 120.
- 8) Classique Larousse: La Harpe; Lycée (1796-1800) et Cours de littérature (1829).
- 9) Abbé Prévost: Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut, Classiques Garnier, 1962, p. 20.
- 10) Ibid., p. 73.
- 11) Ibid., p. 170.
- 12) Ibid., p. 150.
- 13) Ibid., p. 77.
- 14) Ibid., p. 80.
- 15) Ibid., p. 101.
- 16) Ibid., p. 170.
- 17) Ibid., p. 76.
- 18) Ibid., p. 159.
- 19) Ibid., p. 76.
- 20) Ibid., p. 77.
- 21) Ibid., p. 150.
- 22) Ibid., p. 76.
- 23) Ibid., p. p. 210.
- 24) Ibid., p. 212.
- 25) Ibid., p. 215.
- 26) Ibid., p. 24.
- 27) Ibid., p. 18.
- 28) Ibid., p. 106.
- 29) Ibid., p. 227.
- 30) Anatole France: Le Génie Latin, p. 248.
- 31) Abbé Prévost: Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut, Classiques Garnier.p. 225.
- 32) Ibid., p. 19.
- 33) Ibid., p. 150.
- 34) Ibid., p. 105.

参 考 文 献

- 1) Abbé Prévost: Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut, Texte de

1753, suivi des variantes de 1731 avec une introduction et des notes par Maurice Allem, Classiques Garnier, 1962.

1753年版は作者自身によって prince italien のエピソードが挿入されているが、本稿の論点に直接作用を及ぼしていない。

- 2) Abbé Prévost: Manon Lescaut, Classique Larousse.
- 3) Anatole France: Le Génie Latin, Calmann Lévy, 1925.
- 4) Paul Van Tieghem: Le Sentiment de la Nature dans le Prémantisme Européen, A.G. Nizet, 1960.
- 5) アルフレッド・ミュッセ, 渡辺一夫訳 「ロレンザッチョ」, 近代仏蘭西戯曲集, 新潮社